

保育ゼミにおける実践活動Ⅱ —子育て支援室「ぶんきょうにこにこルーム」での取り組み—

鳥丸 佐知子

昨年度よりゼミ活動の一部として「ぶんきょうにこにこルーム」での実践を取り入れ始めた。手探り状態で取り組んできた本活動だが、ようやく軌道に乗りつつある。本論では、昨年度の実践活動から、後半部分を中心に、学生へのアンケート等をもとに報告する。現在2年目が進行中であり、内容的には幅が広がり充実しつつあるが、「心理学」ゼミである筆者のゼミで、その重みづけをどうするかという問題など新たな課題も見えてきた。

キーワード：乳幼児、保護者、ふれあい、実践力

1. はじめに

平成22年9月、本学は創立50周年を迎えた。その記念の学舎として「月照館」が完成したが、その1角に設けられたのが、子育て支援室「ぶんきょうにこにこルーム」である。地域に根ざした子育て支援の場であると同時に、幼児教育や保育士養成のための教育実践の場としての活用が期待されるが、その流れを受ける形で筆者のゼミ（心理学ゼミ）でも、比較的早い時期から、様々な実践活動を試みてきた。

筆者のゼミは、基本は「心理学」ゼミであるところから、これまでは2本柱で活動を進めてきた。ひとつは個人課題として「心理学」に関するテーマで、自分が最も関心を持ったことについて、12000字程度の卒業論文を作成することである。二つ目はゼミ生全体で行う「心理テスト」や「心理療法」「グループワーク」等の体験学習。また通常の授業内では、時間の関係で、十分に伝えられない「発達」関係のビデオ視聴や講義などである。しかし当初から、ゼミ生の中

には、もっと現場に即した内容も経験してみたいという要望が多くあった。そこで「ぶんきょうにこにこルーム」ができたことを機会に、ゼミ単位でもいくつかの実践活動を取り入れることにした。この活動も2年目を迎えている。

具体的な活動内容について、昨年度前期の活動まで、鳥丸（2012）で報告した。そこで本論では、同じ取り組みの後期分の活動内容について、学生への自由記述を中心としたアンケート等も参考にしながら報告したい。この実践活動を始めたことで可能になった多くの体験もあったが、これまで気付かなかった問題、例えばゼミとしての「実践活動」の位置づけ、つまりゼミ全体の中で、どの程度の重みづけをもって取り扱うべきなのか。また「保護者」との触れ合いを、もっとスムーズに進めるための方法は何かなど、新たな課題も見えてきた。

2. 方法

(1) 調査対象

平成23年度の鳥丸ゼミ所属のゼミ生17名

(2) 調査時期

2 回目の実践前・実践終了後の 2 回

(3) 調査内容

***実践前：2 度目の「にこにこルーム」での実践に向けて**

- ・今回を振り返って（良かったところ etc.）
- ・次回に向けて（改良点・気をつけること）

***実践後：2 度目の「にこにこルーム」での実践を終えて**

- ・良かったところ・反省点
- ・保護者との触れ合い関連 etc.

***仮にもう 1 度する機会があるなら**

- ・気をつけたいこと・改めたいところ
- ・ゼミの仲間の実践を見て

*** 2 回の出来について、5 点満点で自己評価。**

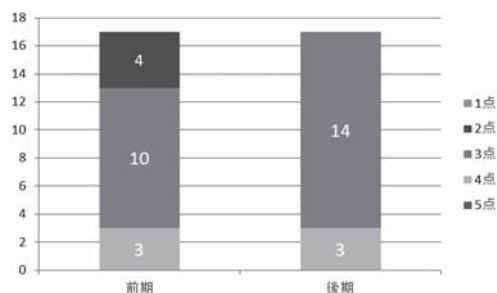


Fig.1 実践における自己評価得点



3. 結果

主な結果について要約して報告する。2度目の実践は 11 月に実施した。この時期というのは、学生のほとんどがすべての実習を終了しており、5 月の実践と異なり、実習を通して多くの乳幼児と具体的に接する機会を経験した後であるという点が大きく異なっている。

まず 5 点満点での自己評価の結果について、前期の平均値が 2.94 点 (SD=0.66) と 2 点台だったのに対して、後期は 3.18 点 (SD=0.39) と高くなった。平均値が上がった一つの要因として、後期の自己評価では、自らを 2 点と評価したものが一人もいなかったということがあげられる。全員が自らを平均以上の出来であったと感じたという結果である。

次に自由記述による回答の中で代表的な回答例を示す。まず実践前の調査(2 度目の実践に向けて)では、5 月の実践であったので、幼稚園の前半の実習まで経験したところでの初体験で

あった。そのため人前に出て何かをするということそのものに慣れていない学生もいた。その影響もあると思われる、次回は「下を見ないでもっと前を見ること」「もっと練習して本番にのぞむ」ことや「導入」や「つなぎ」の部分に関する打ち合わせの不足をなくすこと。「全体の流れを把握する」ことなど、初体験ならではの、頭で考えただけではなく体験したからこそ見えてきた反省点と、今回の目標が記述されていた。

次に実践後の調査(2 度目の実践を終えて)では、前回の経験から、音楽に合わせて体を動かすプログラムを含めることが効果的であることや、対象年齢についての予備知識があったこと。また保育園の実習を含め、すべての実習経験後で、乳児との関わり方も前回よりスムーズになった学生が多かった。そのためさまざまなところで、落ち着いて安心して取り組めたようす

が伺えた。以下に具体例を示す。

- ・役割分担をしたり、授業のほかに時間を作って集まった所は良い点だったと思った。保護者の方とも、保育士に求めることや、育児についての不安などお話することができた。質問されると緊張していたので慣れていきたいと思った。
- ・役割分担を決めて笑顔でしました。「星棒」では、子どもたちと一緒に楽しむことができました。保護者とも話すことができて、良い体験になったと思います。
- ・体を動かす「むすんでひらいて」は子どももよく動いてくれたので良かったと思う。終わってからも、子どもや保護者の方と前よりも関わることができていた。積極的に子どもが来て関わろうとしてくれたので、こちらとしても関わりやすかった。保護者の方と、もう少し会話出来たら良かった。
- ・笑顔で実践できたことが良かった。1歳や2歳の子どもが多く「むすんでひらいて」の表現あそびで楽しそうに真似っこをしてくれていたの、保護者の方も喜んでおられたのでうれしかった。反省点は保護者の方と話があまりできなかったこと。事前に質問を考えておけばよかったと思った。
- ・今回は保護者の方がとても協力してくださり、また子どもの年齢も少し高かったので進めやすかったです。練習不足もあり、グダグダになった部分もありましたが、絵本を前に見に来てくったり、「ほし坊」を積極的にしてくれたり楽しかったです。赤ちゃんを抱っこさせてもらえて嬉しかったです。
- ・「むすんでひらいて」で、体で表現のところでは、前回の「グルグルどっかーん」と同様に楽しく体を動かしてくれていて良かったで

す。パネルシアターでは動物が主役の「迷子の子猫ちゃん」ということで、みんな興味を持ってくれ、前に近づいてきてくれる子もいた。動物を主役にする面白いのもあるけど、分かりやすいのかなと思いました。

- ・「ほし坊」は発達年齢によってさまざまな楽しみ方があって見ていて面白かった（首にストローをかける、触る、三角など形を作る、折るなど）。パネルシアターではピアノに合わせて歌うときの入り方が難しかった。もっと練習したほうが良かった。絵本は役割に分かれて落ち着いて読むことができたので子どもたちや保護者の方も集中して見てもらえたので良かった。

今回の実践では、事前に「パネルシアター」と「ほし坊」をプログラムの中に組み入れること。そして、保護者に積極的に話しかけることを課題として本番に臨むよう教示した。プログラム内容については、対象年齢への配慮、音楽を用いた表現遊びの導入など、様々な点で、前期の実践より、内容的にも広がりや深み、工夫などが感じられた。

しかし今回最大の目的としていた「保護者との触れ合い」という点では、思うようにできなかったと答えた学生もいた。例として「貴重な機会なのに、自分から積極的に話しかけることができなかった。事前に、質問する内容について考えてくれば良かった」「こちらから話しかけるのはとても緊張してしまう」などである。そこには、必要以上に構えてしまう彼女らの姿が垣間見えた。一方で子どもと遊ぶ流れの中で「保育士に求めること」「育児についての不安」などのテーマで、保護者に話を聴くことができた学生もいた。「保護者の人は保育士には笑顔を求めていそうなので常に笑顔でいられるように私も

頑張っていきたいと思った」というような記述もあった。ゼミの仲間の実践を見ての感想では「みんな笑顔いっぱい楽しんでるように見えた」「同じ内容のものでもグループによって雰囲気が異なってくるのが面白かった」「子どもの目の高さに合わせているのが良かった」など、保育者を目指す仲間として、相互に学びあい、高めあっている様子もうかがえた。これらの感想も含めて、自らの実践への振り返りも可能となり、就職に向けての足掛かりともなったようであった。

4. 考察

本学における「保育ゼミ」の在り方は、ゼミ担当者によってかなり様々なパターンがある。通常の講義と異なり、通年で少人数制であるという特徴を生かしながら、担当教員が専門とする分野を生かせるような（筆者の場合は心理学）ゼミとはどういうものなのだろう。またゼミで学んだことが、将来就職した現場でも生かせると学生側に感じさせるものは何なのか。

今回の実践経験は、ほぼすべてのゼミ生にとって、役に立つ体験であったと振り返られた。しかしその準備や練習ために、本来のゼミの時間以外にも多くの時間を必要とした。また、これまでゼミの中で行っていた、心理学関係の別の課題（グループワークやビデオ視聴など）の時間を削らなければならないことも出てきた。このことをどう受け止めるべきなのか。

本年度のゼミでも、にこにこルームでの実践活動は続行中である。2年目に入ったので、ゼミ担当者である筆者自身も、昨年度の経験から多くを学び、すでに終了した前期の実践でも、昨年度前期と比較して、よりレベルの高い実践が可能になったと感じている。さらに本年度は、京

都文教大学の杉本ゼミの学部生が企画した、向島ニュータウンの空き店舗を利用した「ほっこりフェスタ」にも、一部学生は参加し、地域の（障害者を含む）方々との交流も経験することができた。実践活動の場はさらに広がったといえるであろう。地域の方々との交流は、将来現場に出てからも役に立つ貴重な経験となったようである。

しかし、本学は短期大学であるため、学生の在学期間は2年間しかない。その間に、資格取得のための必修科目を含む、多くの授業もこなさなければならない。個別の課題として「心理学」関係のテーマで「卒業論文」を作成することに最も大きな重みづけを置いている筆者のゼミで、この実践活動をどの程度のものとして位置づけるのかが、今後の大きなテーマである。

さらに「にこにこルーム」での実践を考えるとき、もう一つ考えておかなければならない大きな問題があるように思う。そもそも「にこにこルーム」を利用されている親子は、短期大学生のこのような実践活動をどのようなものとして受け止めているのだろうか。ここまでの印象では、好意的に受け止めてくださるお母さま方が多いように思うが、静かな自由な空間を求めて訪問された親子もいるかもしれない。今後は、これらの問題も考慮しながら、実践経験を有意義に生かす方法（例えば卒論の事例として活用する）について探っていきたい。

参考文献

- 1) 鳥丸佐知子 保育ゼミにおける実践活動Ⅰ—子育て支援室「ぶんきょうにこにこルーム」での取り組み—京都文教短期大学『研究紀要』49, 86-95 (2012)
- 2) 鳥丸佐知子 保育ゼミにおける実践活動Ⅱ—子育て支援室「ぶんきょうにこにこルーム」での取り組み—全国保育士養成協議会 第50会研究大会 研究発表論文集 258-259 (2012)